

Tout Passe

Hyacinthe Lavitrano

凡ては去りぬ

イヤチント・ラヴィトラノー作曲

作者は19世紀後期イタリアはナポリ湾頭に浮かぶ美しいイスキア島に生まれ、ナポリで学んだ後、アルジェリアのブーン市に定住し1934年12月16日ここに逝いたフランス国籍の作曲家。

本邦では雪(ロマンツァとボレロ)、ロ-ラ序曲、レナータで馴染まれているが、本曲「凡ては去りぬ」は極めて晩年の作で、パリーでマチョッキの主宰するマンドリン研究誌レスティディアンティナに発表された(1933年6月)。

この頃はマンドリン音楽は既に衰退期に入っており、作者の人生と重なり「素晴らしい青春の日々は過ぎ去った。

あの陽の光はもはや帰って来ない」の感慨が我々の胸に何か熱いものを感じさせるノスタルジックで且つ寂寥感に拉がれる旋律である。

かと思えば中間トリオの部分には一抹の淋しさを漂わせながら、心に安らぎを与えるように明るく歌う部分のあるのは何ものにも替え難い魅力である。

追加資料

遺稿

中野二郎編著

「マンドリン ロマンの薫り」より